

11 結果

3940 人年で 336 人、4531 人年で 88 人が境界域高血圧或いは明確な高血圧をそれぞれ発症した。高血圧の潜在的な予知因子をコントロールした後は境界域高血圧になる相対危険度は 1 日の労働時間が 8 時間未満の群と比べると、1 日の労働時間が 10.0-10.9 時間の群が 0.63 (95%信頼区間 (CI) : 0.43, 0.91)、1 日の労働時間 \geq 11 時間の群が 0.48 (95%CI : 0.31, 0.74) だった。明確な高血圧発症の相対危険度は 1 日の労働時間が 8 時間未満の群と比べると、1 日の労働時間 \geq 11 時間の群が 0.33 (95%CI : 0.11, 0.95) だった。多変量で補正した拡張期血圧 (DBP) と平均動脈血圧 (MABP) の追跡した 5 年間の勾配は 1 日の労働時間が増加するほど減少した。重回帰分析からは 1 日の労働時間は収縮期血圧、DBP、MABP の勾配に対する独立した負の因子だった。

12 結論

日本のホワイトカラーの男性労働者では長時間労働は高血圧のリスクと関連は否定的である。

13 要約

研究目的：長時間労働と高血圧のリスクの関連を評価すること。デザイン：5 年間の前向きコホート研究。セッティング：日本の大阪の職場。参加者：941 人の非高血圧のホワイトカラーの日本人男性（年齢は 35-54 歳）が毎年の定期健康診断で前向きに調査された。調査中に境界域高血圧と高血圧を発症した人達は境界域高血圧と高血圧の偶発例と定義された。主な結果：3940 人年で 336 人、4531 人年で 88 人が境界域高血圧或いは明確な高血圧をそれぞれ発症した。高血圧の潜在的な予知因子をコントロールした後は境界域高血圧になる相対危険度は 1 日の労働時間が 8 時間未満の群と比べると、1 日の労働時間が 10.0-10.9 時間の群が 0.63 (95%信頼区間 (CI) : 0.43, 0.91)、1 日の労働時間 \geq 11 時間の群が 0.48 (95%CI : 0.31, 0.74) だった。明確な高血圧発症の相対危険度は 1 日の労働時間が 8 時間未満の群と比べると、1 日の労働時間 \geq 11 時間の群が 0.33 (95%CI : 0.11, 0.95) だった。多変量で補正した拡張期血圧 (DBP) と平均動脈血圧 (MABP) の追跡した 5 年間の勾配は 1 日の労働時間が増加するほど減少した。重回帰分析からは 1 日の労働時間は収縮期血圧、DBP、MABP の勾配に対する独立した負の因子だった。結語：これらの結果は日本のホワイトカラーの男性労働者では長時間労働は高血圧のリスクと関連は否定的であることを示唆している。

文献 ID 39

1 著者

Nakano Y, Nakamura S, Hirata M, Harada K, Ando K, Tabuchi T, et al

2 タイトル

Immune function and lifestyle of taxidriviers in Japan
日本におけるタクシー運転手の免疫機能と生活習慣

3 掲載誌

Ind Health 36: 32-39, 1998

4 デザイン

断面研究

5 目的

末梢血のリンパ球 (PBMC) のミトゲンの反応とサイトカインの産生に基づいて行うタクシー運転手の職業ストレス調査を、生活習慣と収入に関する面接と結びつけて行うこと。

6 曝露指標

職業ストレス、生活習慣、収入 (質問紙票を使った問診)

7 結果指標

末梢血のリンパ球 (PBMC) のミトゲンの反応とサイトカインの産生

8 比較指標

末梢血のリンパ球 (PBMC) のミトゲンの反応とサイトカインの産生の平均値の比較

9 実施国

日本

10 対象

1992 年と 1993 年の末の時点で関西地方の私鉄、ハイヤー、タクシーの組合の組合員からむ作為に選んだ 40-59 歳の男性運転手。対照は無作為に選ばれた大阪府立公衆衛生研究所に属する 40-59 歳の男性研究者。

11 結果

タクシードライバーのリンパ球のフィトヘマグルチニン (PHA)に対する増殖反応、コンカナバリン A (ConA)、ポークウィードミトゲン (PWM)、そして PHA 誘発性インターロイキン-2(IL-2)と IL-4 の産生は 1992 年には対照群と同じレベルだった。タクシー運転手のミトゲンの反応と IL-2 の産生は 1993 年には有意に減少したが、一方 IL-4 は有意に増加した。PHA の反応が正常だった群は 1992 年に PHA が低反応だった群とは有意に生活習慣が異なった。しかし 1993 年には、これらの違いははっきりしなくなった。過勤務を禁止されていたタクシー運転手の免疫の変化の方が過勤務を許されていた運転手より著明だった。

12 結論

運転のストレスに加えて毎日の稼ぎがタクシー運転手に強いストレスを及ぼしたり免疫学的な変化を誘発した。

13 要約

多くの研究がストレスが免疫機能に影響を及ぼすと報告している。職業運転手は様々な形の職業に関連したストレスにさらされていることが知られている。本研究の目的は末梢血のリンパ球 (PBMC)のミトゲンの反応とサイトカインの産生に基づいて行うタクシー運転手の職業ストレス調査を、生活習慣と収入に関する面接と結びつけて行うこと。我々は 1992 年と 1993 年の末の時点で関西地方の私鉄、ハイヤー、タクシーの組合の組合員であった 40-59 歳の男性運転手の中から無作為に選んで調査した。1993 年の末に彼らは深刻な経済不況に襲われた。タクシードライバーのリンパ球のフィトヘマグルチニン (PHA)に対する増殖反応、コンカナバリン A (ConA)、ポークウィードミトゲン (PWM)、そして PHA 誘発性インターロイキン-2 (IL-2)と IL-4 の産生は 1992 年には対照群と同じレベルだった。タクシー運転手のミトゲンの反応と IL-2 の産生は 1993 年には有意に減少したが、一方 IL-4 は有意に増加した。PHA の反応が正常だった群は 1992 年に PHA が低反応だった群とは有意に生活習慣が異なった。しかし 1993 年には、これらの違いははっきりしなくなった。過勤務を禁止されていたタクシー運転手の免疫の変化の方が過勤務を許されていた運転手より著明だった。これらの結果は運転のストレスに加えて毎日の稼ぎがタクシー運転手に強いストレスを及ぼしたり免疫学的な変化を誘発したことを示唆している。

文献 ID 40

1 著者

Nicolson NA, Van Diest R

2 タイトル

Salivary cortisol patterns in vital exhaustion

vital exhaustion における唾液中のコルチゾールパターン

3 掲載誌

J Psychosom Res 49: 335-342, 2000

4 デザイン

断面研究

5 目的

心筋梗塞の危険予知因子である the syndrome of vital exhaustion (VE)における視床下部・下垂体・副腎皮質 (HPA)系の機能を明らかにすること。

6 曝露指標

スピーチの課題、朝の起床

7 結果指標

ベースのフリーコルチゾールレベルとスピーチの課題・朝の起床に対する反応 (唾液のサンプルを集めて測定)

8 比較指標

VE 群と対照群のコルチゾールレベルの F 値

9 実施国

オランダ

10 対象

29 人の VE (平均年齢 : 51.1 歳) と非喫煙者で明らかに健康な 30 人の対照 (平均年齢:52.2 歳)

11 結果

VE の対象者は対照に比べ、より高いストレスを認知し、よく眠れず、多くの疲労があったと報告した。ベースの cortisol のレベルは VE の対象者では低く、特に夕方低かった。そして疲労との関連は否定的だった。スピーチの課題に対する全体の cortisol の反応は VE 群と対照群で似ていた。しかし VE の対象者は大きな ($\geq 2.76\text{nmol/l}$) 反応を示しにくそうだった。起床に対する cortisol の反応は同時発生的な疲労と睡眠の質の悪化と関連があった。

12 結論

VE において HPA の微妙な低活性があり、これは慢性的なストレスと関連する睡眠障害を通じて起こってくる。

13 要約

目的：心筋梗塞の危険予知因子である the syndrome of vital exhaustion (VE) は過剰な疲労、被刺激性、自信喪失によって特徴付けられる。視床下部・下垂体・副腎皮質 (HPA) 系の調節不良が疲労症候群の潜在的な発病の機序である。しかし極度の疲労症候群における HPA の機能はほとんど知られていない。方法：我々は 2 日間に渡って 29 人の VE とコントロール群から多数の唾液のサンプルを集めることによって、ベースのフリー cortisol レベルとスピーチの課題と朝の起床に対する反応を評価した。結果：VE の対象者はコントロール群に比べ、より高いストレスを認知し、よく眠れず、多くの疲労があったと報告した。ベースの cortisol のレベルは VE の対象者では低く、特に夕方低かった。そして疲労との関連は否定的だった。スピーチの課題に対する全体の cortisol の反応は VE 群とコントロール群で似ていた。しかし VE の対象者は大きな ($\geq 2.76\text{nmol/l}$) 反応を示しにくそうだった。起床に対する cortisol の反応は同時発生的な疲労と睡眠の質の悪化と関連があった。結論：これらの結果は VE において HPA の微妙な低活性があり、これは慢性的なストレスと関連する睡眠障害を通じて起こってくることを示唆している。

文献ID 41

1 著者

Nylen L, Voss M, Flonderus B

2 タイトル

Mortality among women and men relative to unemployment, part time work, overtime work, and extra work: a study based on data from the Swedish twin registry

失業、パートタイム勤務、時間外労働、副業と関連しての男女における死亡率：スウェーデン双生児登録のデータに基づく研究

3 掲載誌

Occup Environ Med 58: 52-57, 2001

4 デザイン

コホート研究

5 目的

失業、パートタイム勤務、時間外労働、副業と関連しての男女における 70 歳前の死亡率を調査すること。(年齢、婚姻状況、子供、喫煙と飲酒の習慣、睡眠薬と精神安定剤の服用、ストレス、交代勤務、人格要因、長期間のあるいは重篤な疾患が潜在性の交絡因子として考慮に入れられた。)

6 曝露指標

失業、パートタイム勤務、時間外労働、副業（郵送によるアンケート）

7 結果指標

70 歳前の死亡率（スウェーデン死亡原因登録）

8 比較指標

失業、パートタイム勤務、時間外労働、副業と 70 歳前の死亡率との関連についての相対危険度

9 実施国

スウェーデン

10 対象

1926～58年に生まれた人々である、スウェーデン双生児登録された人々の中で具体的に上げられた職業に該当していた9500人の女性と11132人の男性

11 結果

1973年に失業中だった人々は男女ともに死亡率の上昇と関連を示した。調整された相対危険度 (RR) (95%信頼区間 (95%CI))は1.98 (1.16から3.38)で、女性は1.98 (1.16から3.38)、男性は1.43 (0.91から2.25)だった。最初の5年間の追跡では男性では3倍のリスクの増加が認められた (RR (95%CI)3.29 (1.33から8.17))。RRは時とともに低下したが24年間の研究期間の間ずっと増加したままだった。女性では週5時間以上の時間外労働は死亡率1.92 (1.13から3.25) (RR (95%CI)と増加する結果となった。男性では最大週5時間の中等度の時間外労働では保護的な効果が示された (RR (95%CI) 0.58 (0.43から0.80))、ところがパートタイム勤務ではRR (95%CI) 1.58 (0.91から2.77)、週5時間以上の副業 (勤務先以外の仕事) がRR (95%CI)1.29 (0.99から1.69) 死亡率の増加を示した。

12 結論

失業と、ある時には仕事の様相がその後の死亡と関連が認められた。そしてそれは社会的、行動、仕事そして健康に関する因子をコントロールしたとしても認められた。女性にとっては職を失うことは男性ほど重要ではないという考えについては、本研究では確認されていない。

13 要約

目的：失業、パートタイム勤務、時間外労働、副業と関連しての男女における70歳前の死亡率を調査すること。年齢、婚姻状況、子供、喫煙と飲酒の習慣、睡眠薬と精神安定剤の服用、ストレス、交代勤務、人格要因、長期間のあるいは重篤な疾患が潜在性の交絡因子として考慮に入れられた。方法：研究のグループは1926～58年に生まれた人々である、スウェーデン双生児登録のサブコホートで構成された。データは1973年の郵送によるアンケートとスウェーデン死亡原因登録の情報に基づいた。全ての対象者 (9500人の女性と11132人の男性) は報告された主な職業によって選ばれ、1973～96年の間に起きた全ての死亡が分析された。対象者は一般の人々からのサンプルとして、対にすることに関わらず治療された。結果：1973年に失業中だった人々は男女ともに死亡率の上昇と関連を示した。調整された相対危険度 (RR) (95%信頼区間 (95%CI))は1.98 (1.16から3.38)で、女性は1.98 (1.16から3.38)、男性は1.43 (0.91から2.25)だった。最初の5年間の追跡では男性では3倍のリス

クの増加が認められた (RR (95%CI)3.29 (1.33 から 8.17))。RR は時とともに低下したが 24 年間の研究期間の間ずっと増加したままだった。女性では週 5 時間以上の時間外労働は死亡率 1.92 (1.13 から 3.25) (RR (95%CI) と増加する結果となった。男性では最大週 5 時間の中等度の時間外労働では保護的な効果が示された (RR (95%CI) 0.58 (0.43 から 0.80))、ところがパートタイム勤務では RR (95%CI) 1.58 (0.91 から 2.77)、週 5 時間以上の副業 (勤務先以外の仕事) が RR (95%CI)1.29 (0.99 から 1.69) 死亡率の増加を示した。結語：失業と、ある時には仕事の様相がその後の死亡と関連が認められた。そしてそれは社会的、行動、仕事そして健康に関する因子をコントロールしたとしても認められた。女性にとっては職を失うことは男性ほど重要ではないという考えについては、本研究では確認されていない。

文献ID 42

1 著者

Partinen M et al

2 タイトル

Sleep disorder in relation to coronary heart disease
冠動脈疾患に関する睡眠障害

3 掲載誌

Acta Med Scand : 69-83, 1982

4 デザイン

断面研究

5 目的

睡眠時間と CHD の有病率の関連を明らかにすること

6 曝露指標

睡眠時間（睡眠時間と睡眠の質についての質問紙票）

7 結果指標

CHD の徴候（AP と MI とと思われる胸痛は標準化された質問紙票で評価された。質問紙票には内科医が AP や MI を含み 15 の特異的疾患のいずれかであると診断したかどうかも含まれている。）

8 比較指標

短時間睡眠（6 時間以下）、長時間睡眠（9 時間以上）、普通睡眠（6-9 時間）群での CHD の有病率

9 実施国

フィンランド

10 対象

5419 人のフィンランド人の成人男性

11 結果

睡眠時間 9 時間以上の群では確定診断された心筋梗塞の有病率が高かった。一方、一晚の睡眠時間 6 時間以下の群ではもっと多くの症候的な冠動脈疾患が起きていた。この関係は年齢、睡眠の質、睡眠薬・精神安定剤内服、喫煙、飲酒、タイプ A スコア、神経質、心血管系の薬剤の内服、高血圧症の既往について多変量解析でコントロールした後も変らなかった。

12 結論

短時間（6 時間以下）睡眠者や長時間（9 時間以上）睡眠者は一晚に 7-8 時間の睡眠者に比べて有意に CHD と関連する疾患が多かった。

13 要約

5419 人のフィンランド人の成人男性における横断的研究では、睡眠時間 9 時間以上の群では確定診断された心筋梗塞の有病率が高かった。一方、一晚の睡眠時間 6 時間以下の群ではもっと多くの症候的な冠動脈疾患が起きていた。この関係は年齢、睡眠の質、睡眠薬・精神安定剤内服、喫煙、飲酒、タイプ A スコア、神経質、心血管系の薬剤の内服、高血圧症の既往について多変量解析でコントロールした後も変らなかった。心血管系の生理学と睡眠の病態生理学がレビューされ、明白な睡眠障害の心血管疾患に対する何らかの関係が議論されている。

文献 ID 43

1 著者

Proctor SP, White RF, Robins TG, Echeverria D, Rocskay AZ

2 タイトル

Effect of overtime work on cognitive function in automotive workers
自動車産業の労働者における認知機能に対する時間外労働の効果

3 掲載誌

Scand J Work Environ Health 22: 124-132, 1996

4 デザイン

断面研究

5 目的

目的：本研究は残業時間の増加が注意力、遂行機能、感情の領域での認知機能の障害の予知因子となるかどうかを調査した。仮説：残業時間が注意力と遂行機能の領域において認知機能の障害に終わる、そして時間外の労働時間とテストの日より前の連続勤務日数の両方ともが感情に影響する。

6 曝露指標

残業（1日8時間を超える或いはテスト前の7日間で5日を超える時間と定義）、連続勤務日数

7 結果指標

注意力、遂行機能、感情の領域での認知機能の障害（神経心理学的テスト）

8 比較指標

連続勤務日数・残業と注意・遂行機能に関するテストにおける実行障害の関連（回帰係数）

9 実施国

米国

10 対象

自動車産業の 248 人の労働者

11 結果

結果：多線形回帰分析による横断的データ（年齢、教育、性、飲酒、学校での留年、ナフサ石油の急性曝露、交代勤務、仕事のタイプ、テスト前の連続勤務日数そしてテスト当日にテストまでに働いた時間数などの影響を調整後）は増加した残業が、いくつかの注意と遂行機能に関するテストにおける実行障害と有意に関連があることを証明した。抑うつ感、疲労そして混乱の感覚の増加もまた、残業の増加と関連していた。さらに、仕事にタイプによって有意な相互作用の影響が観察されたが、ナフサの曝露によっては観察されなかった。

12 結論

残業が注意力と遂行機能の領域において認知機能の障害に終わる、そして時間外の労働時間とテストの日より前の連続勤務日数の両方ともが感情に影響するという仮説を支持している。

13 要約

目的：本研究は残業の増加が注意力、遂行機能、感情の領域での認知機能の障害の予知因子となるかどうかを調査した。方法：自動車産業の 248 人の労働者の行動と認知の機能が神経行動テストの実行によって測定された。テストの前の週に残業（1 日 8 時間または週 5 日を超えて働いた時間と定義された）が給料支払簿の記録より計算された。テスト前の連続勤務日数も測定された。結果：多線形回帰分析による横断的データ（年齢、教育、性、飲酒、学校での留年、ナフサ石油の急性曝露、交代勤務、仕事のタイプ、テスト前の連続勤務日数そしてテスト当日にテストまでに働いた時間数などの影響を調整後）は増加した残業が、いくつかの注意と遂行機能に関するテストにおける実行障害と有意に関連があることを証明した。抑うつ感、疲労そして混乱の感覚の増加もまた、残業の増加と関連していた。さらに、仕事にタイプによって有意な相互作用の影響が観察されたが、ナフサの曝露によっては観察されなかった。結語：これらの結果は残業が注意力と遂行機能の領域において認知機能の障害に終わる、そして残業時間とテストの日より前の連続勤務日数の両方ともが感情に影響するという仮説を支持している。

文献ID 44

1 著者

Rahe RH et al

2 タイトル

Recent life changes, myocardial infarction, and abrupt coronary death
最近の生活上の変化、心筋梗塞そして急激な心臓死

3 掲載誌

Arch Intern Med 133: 221-228, 1974

4 デザイン

断面研究

5 目的

心筋梗塞で生き残った 279 人と急死した 226 人の症例の最近の生活上の変化を明らかにすること

6 曝露指標

最近の生活上の変化（フィンランド心臓協会の IHD 登録の調査と配偶者への面接）

7 結果指標

心筋梗塞と急性の心臓死（フィンランド心臓協会の IHD 登録の調査）

8 比較指標

生活変化単位スコアの平均値

9 実施国

フィンランド

10 対象

心筋梗塞で生き残った 279 人と急死した 226 人（30-65 歳）

11 結果

生活上の変化の大きさにおいては、全ての対象者の中で 1 グループだけが梗塞や死

を経験する直前の6ヶ月間に、1年前の同じ期間と比較して、著明な上昇が認められた。この上昇は特に突然死した犠牲者において明らかだった。最近の上昇では女性は男性と似ていた。

12 結論

生活上の変化の大きさにおいては、特に突然死した犠牲者において、梗塞や死を経験する直前の6ヶ月間に、1年前の同じ期間と比較して、著明な上昇が認められた。

13 要約

ヘルシンキにおいて最近の生活上の変化に関するデータが、心筋梗塞で生き残った279人と急死した226人の症例の記録から集められた。半分近くの症例では最近の生活上の変化に関するデータも配偶者に対するインタビューを通じて別に集められた。配偶者は全ての冠動脈性の死による犠牲者について生活上の変化のデータを提供した。生活上の変化の大きさにおいては、全ての対象者の中で1グループだけが梗塞や死を経験する直前の6ヶ月間に、1年前の同じ期間と比較して、著明な上昇が認められた。この上昇は特に突然死した犠牲者において明らかだった。最近の上昇では女性は男性と似ていた。生き残った人々のすぐ前の年の最近の生活上の変化のデータに関する配偶者の意見はほど良く一致していた。

文献 ID 45

1 著者

Reich P et al

2 タイトル

Acute psychological disturbances preceding life-threatening ventricular arrhythmias

生命に関わる心室性不整脈に先立つ急性の心理学的な障害

3 掲載誌

JAMA 246: 233-235, 1981

4 デザイン

断面研究

5 目的

生命に関わる心室性不整脈に先立つ 24 時間の間の急性の心理学的な障害の有病率を明らかにすること

6 曝露指標

生命に関わる心室性不整脈に先立つ 24 時間の間の急性の心理学的な障害（精神科医と循環器科医とに独立に面接された）

7 結果指標

生命に関わる心室性不整脈（身体的検査、ルーティーンのリボデータ、24 時間ホルター心電図、運動負荷テスト、心電図そして適用があれば心血管造影検査で状態が評価された。）

8 比較指標

生命に関わる心室性不整脈に先立つ 24 時間の間の急性の心理学的な障害の有病率

9 実施国

米国

10 対象

抗不整脈の管理について照会された 117 人の患者

11 結果

62 人が心停止から助かり、55 人が症候性の心室性頻脈を患った。25 人の患者は不整脈に先立つ 24 時間の間に急性の気分障害を経験していた。18 人は 2 以上の心理学的な障害と関連する発作を起こしていた。

12 結論

不整脈に先立つ 24 時間の間に急性の気分障害を経験していた患者は一般的に重篤さが軽度の器質性の心疾患を持っていて安静にしていた人々とははっきりと区別された。

13 要約

生命に関わる心室性不整脈に先立つ 24 時間の間の急性の心理学的な障害の有病率を調査するために、我々は抗不整脈の管理について照会された 117 人の患者において不整脈の発作に先立つ精神状態と心理学的な体験を研究した。62 人が心停止から助かり、55 人が症候性の心室性頻脈を患った。25 人の患者は不整脈に先立つ 24 時間の間に急性の気分障害を経験していた。18 人は 2 以上の心理学的な障害と関連する発作を起こしていた。これらの 25 人の患者は一般的に重篤さが軽度の器質性の心疾患を持っていて安静にしていた人々とははっきりと区別された。

文献 ID 46

1 著者

Rosenstock SJ, Andersen LP, Rosenstock CV, Bonnevie O, Jorgensen T

2 タイトル

Socioeconomic factors in helicobacter pylori infection among Danish adults
デンマークの成人におけるヘリコバクターピロリ菌感染の社会経済的因子

3 掲載誌

Am J Public Health 86: 1539-1544, 1996

4 デザイン

断面研究

5 目的

収入・家屋の状態・教育水準そして職業の因子と血清学的に診断された急性のヘリコバクターピロリ菌感染との関係を明らかにすること

6 曝露指標

収入・家屋の状態・教育水準そして職業の因子（一般健康診断に招待する手紙の中に質問紙票を入れ、事前に回答してもらった）

7 結果指標

急性のヘリコバクターピロリ菌感染（血清学的に診断；ヘリコバクターピロリ菌に対する IgM 抗体の単独の上昇）

8 比較指標

急性のヘリコバクターピロリ菌感染と収入・家屋の状態・教育水準そして職業の因子の関連についてのオッズ比

9 実施国

デンマーク

10 対象

集団研究に参加した 3589 人の成人デンマーク人（男性 1833 人、女性 1756 人）

11 結果

低い社会経済的地位（オッズ比 [OR] =2.2、95%信頼区間 [CI] =1.7、3.0）、短期間の学校教育（OR=2.0、95%CI=1.3、2.5）、訓練/教育の不足（OR=1.4、95%CI=1.2、1.7）、不熟練労働（OR=1.7、95%CI=1.2、2.5）そして職業に関連したエネルギーの高い消費（OR=1.4、95%CI=1.1、1.9）はヘリコバクターピロリ菌の慢性的感染の尤度を増加させていた。感染は海外に住んだことがある人に多かった。免疫グロブリン M 抗体は単独で離婚した人（OR=2.3、95%CI=1.2、4.4）、未婚の人（OR=2.0、95%CI=1.1、3.8）そして長時間働く人（OR=2.0、95%CI=1.1、4.0）で高いことが多かった。

12 結論

教育と職業の因子は成人においてヘリコバクターピロリ菌の慢性感染の尤度と関連が認められた。急性の感染率は独身者で多かった。

13 要約

目的：本研究では収入・家屋の状態・教育水準そして職業の因子と血清学的に診断された急性のヘリコバクターピロリ菌感染との関係を調査した。方法：集団研究に参加した 3589 人の成人デンマーク人についてヘリコバクターピロリ菌に対する血清抗体の免疫グロブリン G と免疫グロブリン M が測定された。結果：低い社会経済的地位（オッズ比 [OR] =2.2、95%信頼区間 [CI] =1.7、3.0）、短期間の学校教育（OR=2.0、95%CI=1.3、2.5）、訓練/教育の不足（OR=1.4、95%CI=1.2、1.7）、不熟練労働（OR=1.7、95%CI=1.2、2.5）そして職業に関連したエネルギーの高い消費（OR=1.4、95%CI=1.1、1.9）はヘリコバクターピロリ菌の慢性的感染の尤度を増加させていた。感染は海外に住んだことがある人に多かった。免疫グロブリン M 抗体は単独で離婚した人（OR=2.3、95%CI=1.2、4.4）、未婚の人（OR=2.0、95%CI=1.1、3.8）そして長時間働く人（OR=2.0、95%CI=1.1、4.0）で高いことが多かった。結論：教育と職業の因子は成人においてヘリコバクターピロリ菌の慢性感染の尤度と関連が認められた。急性の感染率は独身者で多かった。

文献ID 47

1 著者

Russek H, Zohman B

2 タイトル

Relative significance of heredity , diet and occupational stress in coronary heart disease of young adults

冠動脈疾患の若年成人における遺伝、食事そして職業性ストレスの相対的意義

3 掲載誌

Am J Med Sci 235: 266-275, 1958

4 デザイン

断面研究

5 目的

冠動脈疾患の若年成人における遺伝、生活習慣、職業ストレス等の相対的意義を明らかにすること

6 曝露指標

遺伝、生活習慣（食事の脂肪、運動、喫煙）、肥満、職業性ストレス

7 結果指標

冠動脈疾患

8 比較指標

遺伝、生活習慣、肥満、職業性ストレスに関する冠動脈疾患患者と対照との比

9 実施国

米国

10 対象

冠動脈疾患の患者 100 人（年齢 25-40 歳、男性 97 人、女性 3 人）と年齢、職業、民族的な起源が似ているマッチさせていない対照 100 人

11 結果

遺伝：片方の親または両親の明らかな冠動脈疾患の既往は冠動脈疾患の患者では67%だったが対照では40%だった。食事の脂肪：100人の冠動脈疾患患者の53%が食事で過度の脂肪を摂取していた。対照では20%だった。職業性ストレス：仕事由来のひどい感情の緊張は冠動脈疾患患者では91%に見られたが対照では20%だった。肥満：冠動脈疾患患者では26%に、対照では20%が肥満だった。過度の喫煙（30本以上）：冠動脈疾患患者では70%、対照では35%だった。適度な運動：冠動脈疾患患者では58%、対照では60%だった。

12 結論

若年の患者では冠動脈の動脈硬化の発症と進行は相対的に3つの主要因子（遺伝、高脂肪食、仕事由来のひどい感情の緊張）に依存している。

13 要約

抄録なし